民具調査から山村研究へ

――民俗学者・湯川洋司の誕生――

佐野賢治

故・湯川洋司（1952～2014）の人と学問は、『変容する山村―民俗再考』（1991年9月　日本エディタースクール出版部）、『山の民俗誌』（1997年10月　吉川弘文館）の二著作によく表れている。この拙文では、その基調が形成された学生時代をともにした同志としてその軌跡をかえりみ、誠実・几帳面であった一民俗研究者の誕生の一記録としておきたい。

「民具」との出会い

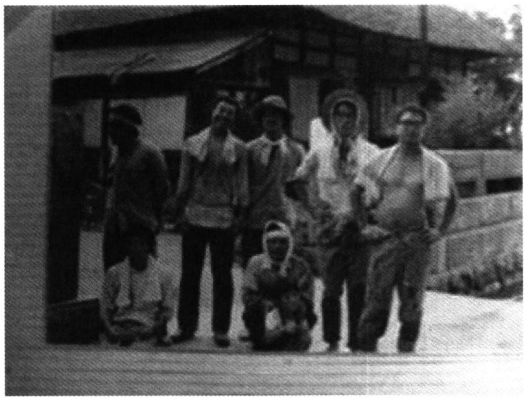
1971年8月、当時東京教育大学文学部史学方法論専攻の2年生であった私は、一年後輩の湯川さんと土屋積（現・長野県中野市立博物館長）の両氏とともに泊り込みで山形県米沢盆地の農村地帯で使われてきた民具整理を始めていた。所は盆地のほぼ中央にあたる米沢市六郷町西藤泉に設立された民具館であった。

この民具館は篤農家・遠藤太郎氏（1904～76）が農村の遅れは教育にありと1959年、山形県の農村部では二番目の学校法人立の広井郷幼稚園を設立、さらに農村の歴史を知るためにと高度経済成長の中で不用となった農具を中心に譲り受け、近隣の廃寺の古材を融通して1967年に建てたもので、謙遜して「がらくた館」と名乗っていた。外観は納屋風であるが、館内には数千点に及ぶ民具が所狭しと収蔵されていてわれわれを驚かせた。

当時、民具という言葉もようやく世に知られるようになってきた頃で、民具の整理方法、収蔵台帳の作成の仕方からスケッチ図、実測図の描き方、写真撮影における留意点などすべてが手探りの状態であった。ともかく、文化庁編『民俗文化財収集の手引き』（1965年　第一法規）を参考に、一点一点の民具の名称、使用法、使用年代、製作法、製作年代、材料、保管場所などを遠藤さんから聞き取り、考古学専攻の土屋氏の意見も取り入れて簡単な見取り図と写真をつけて、収蔵カードを作成していった。夏、トタン屋根の「がらくた館」は日中、室温は40度近くなり、冬は幼稚園に隣接した遠藤さんの園長宅との間の雪道作りから始まる整理作業も3年ほどで、二千点余のカードを作成し一段落した（佐野賢治「置賜通い」『あるく・みる・きく』247　1987）。

その後は、筑波大学はじめ、埼玉大学、東京女子大学、國學院大學の学生も参加するようになり民具の整理作業と館の整備は一歩一歩進んでいった。この作業の中で、湯川さんと私たちは民具を通して農村の民俗を具体的に学ぶ意味を体感していった。実際、整理作業の合間に、にわか百姓になって農作業を体験したり、紛体工学の三輪茂雄先生の教示のもと石臼でそば粉を引いたり、遠藤さんの指導で千歯を使って稲を扱いたり、近くの主婦の指導の下、ハンギリ（木桶）を用いて草団子づくりなどした。館の近くの長橋集落、また泊り込みで隣の川西町の大舟地区の民俗調査なども進めていった。

米沢の民具整理は、作業を覗きに来た地元農民との問答などを通して、われわれにとって民俗学を学ぶ意味が問われる場ともなった。柳田國男の説く経世済民、実践志向と個別科学としての民俗学を如何に結び付けるか夜が更けるまでよく議論した。そこでの問題点を大学に帰って議論する場として物質文化研究会を立ち上げ、1974年7月には米沢市六郷遠藤民具館・東京教育大学物質文化研究会の連名で会誌『我楽苦多』を発刊した。これが当時、東京港区の二の橋に所在した日本常民文化研究所の河岡武春氏の目に触れ、『民具マンスリー』(1968年創刊) 誌上で紹介され、民具研究関係者との縁ができた。また、民具を体系的に学ぶために立教大学の宮本馨太郎先生を非常勤講師にとの要望も民俗学教室の主任・直江広治先生に出した。この申し出は、さっそく翌年から受け入れられた。



左：民具整理の間に、農業体験。ネッキタテ、(田乾しの為の排水ほり) を終えて、遠藤家の前で。後列左から二人目が湯川氏。1974年夏

右：遠藤太郎氏、宏三 (息子)、康子 (娘) さんと共に。中央が湯川氏。1972年冬

当時、宮本馨太郎は民具を有形の民俗文化財として民俗学の範囲の中で考え「用途分類」を採用していた。一方、武蔵野美術大学で生活学を講じ、1966年日本観光文化研究所 (現・旅の文化研究所) を開設、そこを拠点に、雑誌「あるく・みる・きく」を創刊、活躍していた宮本常一は、民具を身体的機能の延長である道具との観点から新たに民具学を提唱、「機能分類」を唱えていた。われわれが米沢の民具調査を始めた時期は、このように民具の調査・研究の萌芽期に重なっていた。

1974年には、日本青年館で日本常民文化研究所の主催で民具研究講座が開かれ、その席上学会設立の要望が全国の民具研究者から出され、翌1975年に日本民具学会が成立、民具学の研究と普及、民具の調査・収集・保存等にかかわる会員相互の連絡を図ることになった。民俗学専攻の湯川さんは、このような中で民具を民俗誌、生活の中で位置づける立場を固めていった。

民具研究は民具誌を作成する方向を中心にして進められるべきことを強く思う。その場合、基本的には「用途分類」に従い民具を「仕事」の体系に則して「民具体系」として示し、併せて「機能分類」により民具の資料化を図るものが民具誌の望ましい姿と考える。そのことにより地域の生活文化の特性を明らかにすることができようし、伝承（聞書き）だけに頼りがちな「民俗誌」の内容に深みと厚さを増すことが期待できると考えている。それは民俗誌も民具誌も地域の民俗構造を明らかにするという点で、基本的に同質だと思うからである。

（「民具研究の二、三の問題」『山口大学教養部紀要・人文科学編』18　44 頁 1984.11）

米沢の民具整理が進行する中で、われわれは全国的にみて米沢地方を特徴づける民具は何かと話し合った。四囲を山に囲まれる米の里、米沢は多様な山岳信仰を醸成し、中でも飯豊山に十三歳になった少年が成人登拝のために籠る御行屋がまず候補にあがった。加えて、米沢藩の御用窯の伝統を引きながら農家でも三五八漬の漬物甕などに重用されてきた成島焼をとりあげることにした。遠藤太郎さんの対応は早かった、御行屋 3 棟が早速移築された。このような信仰関係の施設は当事者の理解と協力がないと受贈も難しい。御行屋 3 棟と山岳登拝用具はその後平成 9 年 12 月、国の重要有形民俗文化財「置賜の登拝習俗用具及び行屋」に指定され、千葉県佐倉の国立歴史民俗博物館にも展示されるなど我が国の山岳信仰の一端を表す貴重な資料となった。

1974 年夏、実際われわれも飯豊登山を試みた。一方、民芸の柳宗悦が絶賛した成島焼は米沢焼きとして研究所の同人、水野哲氏によってその伝統が今に継がれている。

左：御行屋（国指定重要有形民俗文化財　置賜民俗資料館）
右：成島焼展示室（置賜民俗資料館）

こうして、遠藤太郎さんを中心とする地域の人々とわれわれ民俗学を専攻する学生との交流の中で「がらくた館」は農村文化研究所付設の置賜民俗資料館として生まれ変わっていった。つまり、地域の農民自らが自身の足跡を知り未来を志向する場として 1976 年農村

文化研究所を設立、79 年には財団法人化し、その資料として民具を位置づけたのである。その折、民具資料は全部で 5 万円ほどにしか査定されなかった。いずれにしろ理事には地元の農民があたり、規模も基本財産も国内で最小クラスの研究所・資料館が誕生した。湯川さんも私も村の実生活の中で民俗、民具に触れ、そこから読み取れる意味を民俗学徒として咀嚼し、地域の人々とともにこれらの資料を記録・保存するだけではなく、改めて地域の将来に活かしていく方向の可能性を確信したのである[1)]。

共感する民俗誌の作成

民具研究の目標は、単にモノを中心として民俗を見ていくといったところにとどまるものではなく、民具に反映された人々の観念、あるいは生活の向上にむけられた努力、あるいは心意といった精神現象を、民具そのものに駆使されている技術を考慮に入れて考察し得るところに存在するといえるのではなかろうか。(中略) 民具館を“民具館”としてすましてしまわずに、大きくいえば社会教育活動を担う一つのセンターとしての機能を発揮することのできるような方向をめざす必要があるのではないか。

(「民具館と民具研究について—われわれの課題としての」『我楽苦多』Ⅱ　9 頁 1974)

湯川さんは米沢の民具整理で民具から民俗、人々の暮らしを見る目を培った。さらに、旅人、寄寓者の存在であるわれわれは必ず整理期間中に、郷土人である村の人々と民俗学的視点を踏まえて地域社会の抱える問題や将来像を語り合う場を設けた。広井郷幼稚園を会場に緑陰講座として始まったこの集いも、やがて、折角の機会、話題提供を限られた人たちだけではなく広く公開してほしいとの要望が聞かれるようになり毎夏盆前の八月の第一土曜日を定例に「農村文化ゼミナール」として置賜 3 市 5 町村を持ち回りで行うまでに成長していった。記念すべき第 1 回は 1988 年川西町で「祭り—その歴史と展望」と題して開かれた。その後、地元の有機農業家・星寛治、民俗研究家・武田正さんと私が常勤的な講師を多く務めたが、湯川さんは時間が取れる限りはるばる山口から駆けつけ基調講演者、パネリストの役を果たしてくれた。宮田登、川田順造先生も基調講演の講師として話題の提供をしてくれた。

湯川さんは校務の都合で 8 月初めのこのゼミナールに参加できない場合は、いつも丁寧に詫びてきたが、病を得て死期を悟ったのか、2014 年 8 月 2 日開催の第 27 回の農村文化ゼミナールには必ず行くと連絡してきた。その後、体調不良で参加できない、代わりに秋に盛岡で開催される日本民俗学会の帰路は必ず寄るとの再連絡があった。この言葉もむなしく 9 月 30 日鬼籍に入ってしまった。毎夏の米沢の活動は、湯川さんの民俗学にとって出発点になったとともに、自身の研究の進展を同志と確かめ合う場ともなっていたのだろう。

時代の変転のなかで民俗が変化することはごくあたりまえのこととしてありうるだろうが、その変化は言うまでもなく住民自身の判断によって選択され続けてきた結果にほかな

らないはずである。その判断の結果が民俗に表出されているとみることができるならば、幾多の民俗を描き重ねることにより、そうしたもくろみも可能になるのではないだろうか。

（『変容する山村』1991　231 頁）

湯川洋司、置賜民俗資料館関係の論考（湯川洋史・作成）

論文名	掲載誌・雑誌	巻号	該当頁	掲載年月	発刊団体および著者
民具館と民具研究について－われわれの課題としての－	我楽苦多	2号	1－13	1974年11月	東京教育大学物質文化研究会　米沢市六郷町遠藤民具館
民具の範囲－民具文献目録作成に向けて－	我楽苦多	4号	3－19	昭和50年6月	同上
特集に関してのお断わり	我楽苦多	4号	20	昭和50年6月	同上
民具の範囲－民具文献目録作成に向けて－	我楽苦多	5号	69－70	昭和50年11月	同上
「民具研究私見」を読んで	我楽苦多	6号	20－22	昭和51年6月	農村文化研究所付設置賜民俗資料館
桶屋聞書	農村文化	2号	2-4	昭和51年8月	農村文化研究所
民具の素材－植物性素材をめぐって－	農村文化	6号	4	昭和52年4月	農村文化研究所
カテギリ	農村文化	8号	3	昭和52年8月	農村文化研究所
新発田市赤谷小学校郷土室	我楽苦多	8号	45－46	昭和53年4月	農村文化研究所付設置賜民俗資料館
「調査の意義と課題」及び「残された課題」『昭和53年度石臼・ハンギリ調査報告』（石臼・ハンギリ調査班〔小熊誠・菊池建策・斎藤純・矢田隆・中村修也・弘本真理子・中山望〕と共同分担執筆	我楽苦多	9号	53－62（内、53－55と59担当）	昭和54年8月	（財）農村文化研究所付設置賜民俗資料館
図書紹介　厚木の民家1・2	我楽苦多	9号	65－66	昭和54年8月	（財）農村文化研究所付設置賜民俗資料館
籾ぶち棒・豆ぶち棒	農村文化	19号	4	昭和54年12月	農村文化研究所
冬のはきもの	農村文化	20号	8	昭和55年4月	農村文化研究所
わらじ作りの会	農村文化	20号	9	昭和55年4月	農村文化研究所
庚申講	置賜の庶民生活（二）民間信仰		92－95	昭和60年10月	農村文化研究所
冬至南瓜			152－155		
初午			157－160		
四十九日・百ヶ日	置賜の庶民生活（三）人の一生		202－	平成1年3月	農村文化研究所
三十三年の石仏			205－208		
遠藤康子さんのこと―思い出すままに―	遠藤康子を偲んで　おかげ様で　-ニュージーランドだより―（私家本）		17	平成25年7月	遠藤宏三

湯川さんは何よりも民俗誌の作成を地元住民の目線から見ることから始めた。学術的に言えばイーミックな立場からの解説ということになる。

こうした姿勢は、湯川さんの学生時代における米沢での体験や当時、東京教育大学では学園紛争の余燼がくすぶりさらにつくば移転問題も抱えた中、学問とは何か、民俗学を学ぶとはどういう意味があるのか若者なりに真剣に議論していたことが背景にある。物質文化研究会などでも『日本老農伝』の著者・大西伍一氏や新進気鋭の中沢新一氏らを講師に頼み勉強会を催したりした。農学部総合農学研究室では、成田に分室を設け農民の目線に立った農学を目指していた（『村と学校を結ぶ』1～7　1965～74）。中島紀一助手は米沢の夏の合宿にも顔を出してくれ、有機農業の現代性などについて解説してくれた。また当時最も先鋭的な理論を展開していた言語学教室の仲間も、日常的な言語生活に立脚するフィールドワークの重要性を主張していた（『フィールドへの歩み』1～6　1972～75）。

こうした中、もともと在野の学である郷土研究に始発する民俗学徒にとって、フィールドとは調査の場だけであってよいのかと論議を繰り返した。1975年、湯川氏さんらと東京教育大学民俗研究会を発足させ、栃木県矢板市寺山観音寺を宿所として望ましいと考えられる民俗調査を実施し、その報告を中心に『むら』を発刊したが、創刊号が終刊号になってしまった。そもそも民俗学研究会とするか民俗研究会と称するか、意見がまとまらない中での出発であった。

人々の暮らしをよく見て、それを的確に読み取ること、すなわち課題の設定こそが大切であろうから、その課題を追及する作業が既存の民俗学とは相容れないのだとしたら、それは民俗学が人々の暮らしに分け入る力を失ったというに過ぎない。－中略－年寄りたちの口から語られた言葉によりながら、その言葉の背景や底に潜んでいるものをすくい取ることが、すなわち民俗誌を書くことにほかならないと思うようになったことである。それは「調べる」とか、「調査」とかいうような言葉とは大きく隔たったところに位置する行為ではないか、と思う。

（『山の民俗誌』1997　37頁）

湯川さんは、社会科学的な合理性で暮らしの仕組みを捉える先鋭的な人類学や社会学の調査、方法論ではなく、地元の人々に共感を持って接近する姿勢、態度で臨み、そこから描き出させる民俗誌の作成を強く志向し、実践に移していったのである。

“山に生かされる”—山村民俗誌の効用

湯川さんは、神奈川県山北町、もともと山村の生まれである。筑波大学の大学院生時代には新潟県岩船郡山北町をフィールドとする「さんぽく研究会」の主要メンバーとして活躍、ナギノ（焼畑）などを調査する。この研究会は、湯川さんの後輩にあたる古家信平現筑波大学教授らを中心に活動したが、東京教育大時代からの民俗調査論の有り方を省み、

院生個々の専門性よりも地元の人々と共に民俗の意味を考えることを第一義にあげていた。「さんぽく通信」がその相互交流の窓口になっていた。

神奈川県の西端のその名も同じ山北町の生まれで、幼くして地図に同名のムラを発見して心を引かれていたと語る好人物。専門は山村生活で、なかでも焼畑、狩猟といった山の生業とそれにまつわる信仰に関心をもって会津地方の調査研究を進めてきた。山北調査では、カラトリイモやアワなどの稲以外の穀物類に関心を持っている。山北町は朝日連峰を東に控え、山熊田や雷など山ふところに抱かれたムラが多く、格好のフィールドである。

（『さんぽく通信』1　4頁　1979.6.20）

湯川さんは、その誌上で後輩から山村に関係づけられて人物紹介されるほど、誰からも「山村男」として見られていた。湯川さんの原点に故郷、山北町の山村風景があり、そこに暮らす人々が常に脳裏に去来し、常日頃話題にすることが多かったからであろう。私は、愛知大学で教員をしていた時、親に転勤族の多い学生に、故郷はどこかとアンケートで聞いたことがある。小学校時代を過ごした場所が母校のイメージと重なり故郷との記載が多かった。湯川さんは、それどころではなく誕生から大学時代まで、下宿もせずに山北町に居住した。長じて、東京教育大学、筑波大学で個別科学としての民俗学を学ぶことになるが、山村の人々、古老との人間関係に根差した民俗誌を描く志向が芽生えるのも当然といえば言えた。

こうして、湯川さんは、1973年福島県南会津郡只見町布沢、1975年熊本県球磨郡五木村、1987年夏からは愛媛県東宇和郡野村町の惣川地区といった山村に入る。山村の「人々と語り合い、感じ、そして教えられ、考えることの方が大切」（『惣川民俗誌』1　1989）と論理的な結論を急がず、一旦訪れた地元住民との関係を終生絶やさず通い続けることになる。学生時代はもとより、熊本県教育庁文化課、山口大学に職を得てから訪れた山村は数えきれないことになる。その成果が、巻頭に挙げた二冊に凝縮されている。

山村は戦後、産業構造の変化による林業の衰退、高度経済成長を支えるダム建設、そして現在、少子高齢化に伴い村自体が存亡の危機に立たされている。湯川さんは、こうした現況の中で、自身が足を運びまとめたそれぞれの山村の民俗誌を踏まえ、村の再活性化を願い、決して声高ではないが、具体的な事例を挙げながら村人には処方箋を、為政者にはより有効な施策を提示し、時には翻意、改善を求めていった。

事業者の国が約束する五木村の生活再建は、水没者の生活を対象とする。「補償」とは本来そうしたものだろうが、言うに言われない思いを飲み下してきた村人の存在とその未来を考慮すれば、ダム建設による利益がそうした村人の蒙る不利益を凌ぐものでなければ、その大義も正当性もなくなる。仮に五木村の人々が作り上げてきた歴史や民俗の重さをは

かるならば、それはこの大義や正当性を疑うほどに重い。

（『毎日新聞』西部本社版夕刊「五木民俗記」全15回連載の14　2002年6月21日）

湯川さんはダム問題で揺れる五木村に関しては、村内にダム建設賛成・反対、移転賛成・反対の意見があるなかで新聞という公器を通して発言する。これは地元住民からさまざまな意見を聞くことはむろん、長年の調査で得られた民俗誌に基づく確固たる自信がなければできないことである。民俗誌のみではなく、『九州山地五木谷における堂を中心とした村落自治の伝統に関する民俗学的調査研究』（科研費成果報告書　2004年3月）、『近代山村開発史の民俗学的研究―熊本県五木村を事例として』（同　2011年3月）など学術的な資料報告も後世に残した。

湯川さんが学問の対象としてはともかく、心情的にもこよなく愛した山村、そこに住む人々は現在、生存の危機にさらされている。実際笑い話ではなく、猿が爺婆に向かって柿を投げる光景などが見られるのである。日本の村の現状を見ると、全国775市町村の管内に所在する62,273集落のうち、65歳以上の高齢者が半数以上を占めるいわゆる限界集落は2006年国土交通省の報告で7,878集落あり、その数は現在も増え続けている。さらに2014年、日本創生会議は2040年には日本の約半数に当たる896自治体が消滅するとのレポートを発表して、地方の自治体関係者を戦慄せしめたが、山村の多くはそこに含まれる。

湯川さんの作成し残した山村民俗誌は、このような状況の中、かつて人々が山村を開発した逆の方向、山を自然に返す際のテキストとなる。山村の人々が語る「山に生かされる」との心意は、山の神をその間において自然と人間の共生の在り方を具体的に示してくれている。宮崎駿監督がアニメ『もののけ姫』で訴えたかったところに通じる現在性を持つのである。

民俗学における山村研究の流れは柳田國男による著作、編著、『山の人生』（1926）、『山村生活の研究』（1937）を引くといってもよいだろう。大きく括れば、山に棲む人々の心意、山村の生活誌ということになる。また、山村生活調査の最終項目は「幸福な家、仕合せよき人や家の話」となっている。湯川さんのなしえた仕事は、山村に住む人々から誠実にそして律義にかつての村の生活を聞き、それを総合して村人の世界観を導き、自然と神と人の共生、「山にいかされる」との言葉の中に山村の人々の幸せの具体像を読み取り、描いたこと、山村民俗誌としてまとめたことにある。

今後、日本の山村の行方を問うとき、来し方の山村の在り方を踏まえることが未来への展望を開くことになる。湯川さんの山村民俗誌はその責を果たすに十分な業績であるといえるのである。

追記

私は二歳年下の湯川さんを勝手に弟分と考えていた。同じ年の実弟もすでに失い、このたびの鬼籍入り、本当に寂しい。米沢の民具整理をともに始めた湯川さんと同期の長野県中野市の土屋積さんから当地の豪農、山田家の民具整理を頼まれたのも同じ没年で因縁を感じた。米沢はじめ、佐久間惇一さんを通して、新潟県新発田市五十公野の民具整理の折など夜を徹して、民俗・民具論はじめ青臭い議論をした。私も湯川さんも大の子供好きで広井郷幼稚園では夏季キャンプを提案、採用され、一日保父などもした。御行屋生活の体験の一環としての飯豊山行も貧しい装備でよく敢行したと今ではあきれる。先輩を出しおいて幼稚園教諭の嫁さんをもらい、新婚の二人の運転手を務めたこともあった。結婚式の司会も湯川さんに頼んだ。山口には、集中講義、2003 年の日本民俗学会第 55 回大会に担当理事として訪れ、新築の家に泊まらせていただいた。このたびは、湯川洋司論をまとめようと書斎の整理まで試みたが、ガリ版刷の『我楽苦多』などを手にすると思い出が走馬灯のように浮かび立ち止まり、論文として形を成すには至らず、追悼文としても中途半端な一文となってしまった。あの世の湯川氏、編集子に詫びる次第である。

左：米沢民具整理初年度 1971 年の冬（左より、湯川、土屋、佐野）
右：飯豊山登山（中央・湯川、左隣・佐野、右端・遠藤宏三氏）

［注］

1) 遠藤太郎氏の子息で、ともに民具整理をし、現在は農村文化研究所理事長として活動している遠藤宏三氏から湯川氏の学生時代の一面を記した文が寄せられた。置賜民俗研究史の資料（次頁）として掲げておく。